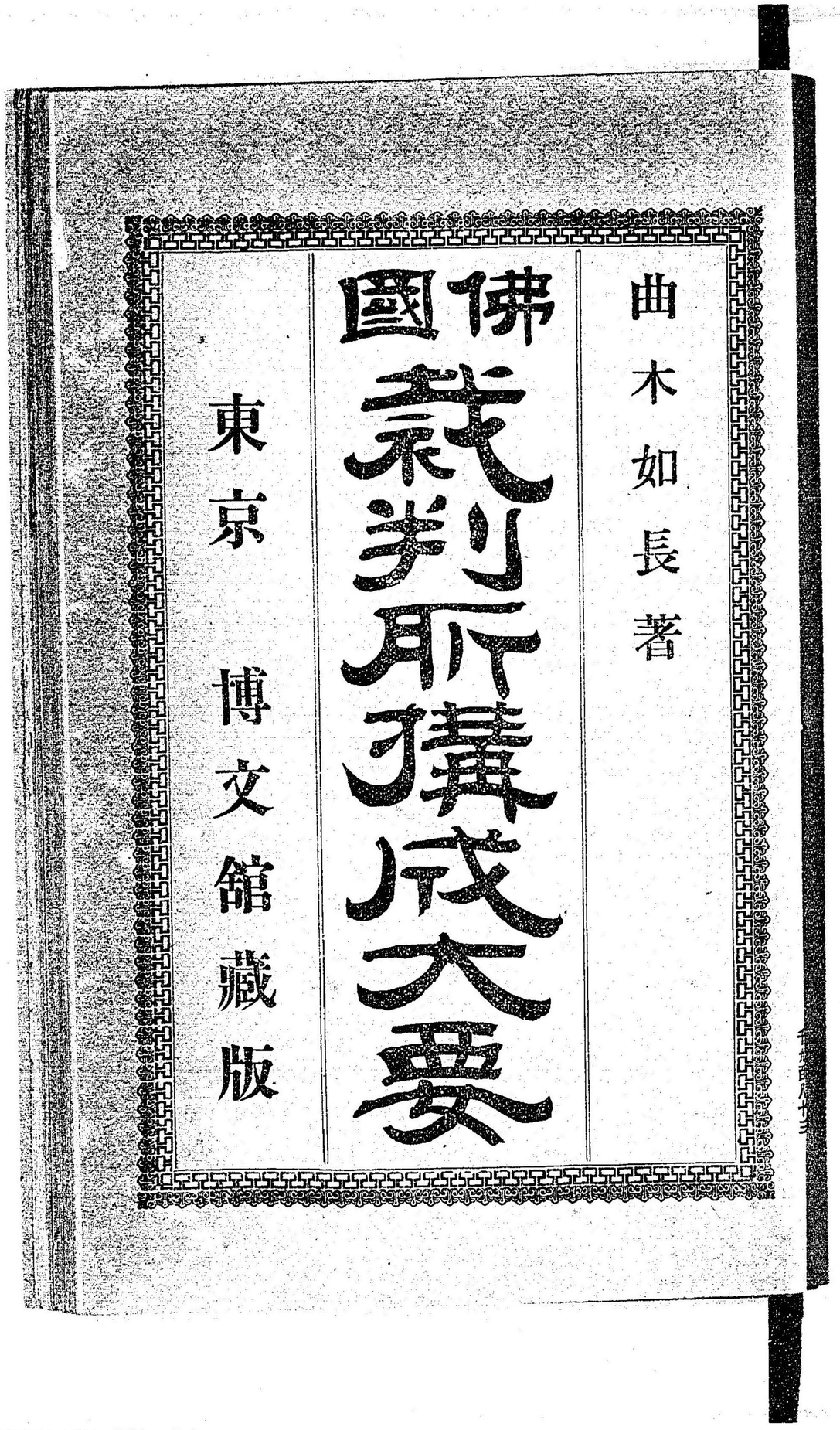


036507-000-2

21-258

仏国裁判所構成大要

曲木 如長／著

M23

BBR-0239

現今佛國裁判所搆成大要目次

緒論
大審院
控訴院
始審裁判所
治安裁判所
公吏裁判所附屬吏
公證人
代訟人
評價人
使吏
書記

附錄
裁判所構成改正ニ關スル法律

現今佛國裁判所構成大要目次終

現今佛國裁判所構成大要

曲木如長著

緒論

佛國裁判所ノ構成ヲ講究スルニ當リ先ツ司法權ノ如何ト其司法權ル職務及ヒ司法制度ノ原則ヲ畧述セントス蓋シ司法權ハ行政權ノ一部ニシテ何レノ邦ニ於テモ行政權ヲ掌握スル國ノ元首（帝王、大統領）ニ屬ス現今ハ共和國大統領ノ名ヲ以テ裁判ヲ宣行スル「憲法ニ定ムル所ナリ謹テ我帝國憲法ヲ案スルニ第五十七條ニ「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」ト明記シ天皇ノ大權ニ屬スル「ヲ示サレタリ又同條第二項ニ「裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」トアリテ司法ノ組織ハ獨リ法律ニ準據シ行政權ノ左右スヘカラサル「ヲ確認セラレタリ司法

ノ職務ヲ約説スレハ凡ソ人民ノ間ニ生シタル爭訟ヲ判シ犯罪ヲ處罰シ擬スルニ法律ヲ以テシ因テ社會ノ安寧秩序ヲ保維スルニ在リ其任ヤ實ニ重且ツ大ニシテ人民ノ權利ヲ伸暢スルニ缺クヘカラサルモノト云フヘシ

司法行政二權ノ區別

佛國ニ於テ昔時王政ノ時代ニハ司法行政ノ區域判然ナラスシテ動モスレハ其權力ノ矛盾抵觸ヲ生シタリシカ千七百八十九年革命ノ際憲法議會ニ於テ全ク右二權力ヲ判別シ爾來其制ヲ維持シタリ

權限爭議

抑司法官ト行政官トノ職務ハ之ヲ兼行スル能ハサルヿ素ヨリ論ヲ待タスシテ相互ニ其職權ヲ侵犯スルヿヲ禁ス故ニ若シ司法官ニシテ行政上ノ事件ヲ裁判スルカ如キヿアル片ハ權限ノ爭ヲ生スルニ至ルナリ（權限ノ爭ヲ審理シ終結ノ裁定ヲ下スハ參議院ノ職掌ニ屬ス）

裁判官

凡ソ裁判官ハ至公至正ニシテ學識經驗ニ富ミ法律ニ定ムル所ノ資格ヲ具備スル者タラサルヘカラス即チ其地位ノ鞏固ヲ要シ終身官トシテ其意ニ反シ濫リニ罷免スヘカラサルヿハ司法權ノ獨立ニ缺クヘカラサルモノニシテ我カ憲法ニ於テモ明文（第五十八條）ヲ設ケラレタルヿハ讀者ノ知ル所ナリ

檢察官

各裁判所ニハ行政權ノ代理者ナル檢察官アリテ公ノ秩序ヲ維持スルヿニ注意シ幷ニ法律ノ執行ヲ請求シ刑事ニ於テハ公訴ヲ提起シ民事ニ於テハ婦女、幼者、無能力者等ヲ保護スルノ任アリ但シ裁判官ノ如ク終身官タルニアラスシテ政府ニ於テ隨意ニ之ヲ轉免スルヿヲ得而シテ直ニ司法大臣ニ隷屬シ其指揮監督ヲ受クル者トス（近時公布ノ我裁判所構成法ニ據レハ檢事ノ地位ニ裁判官ト同一ノ擔保ヲ與ヘラレ以テ刑法ノ宣告又ハ懲戒處分ニ由ルニ非サレハ其意ニ反シテ免職セサルモノトナシタリ）

裁判ヲ求ムルノ權

凡ソ人民ハ正當ナル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ有スルヿ而シテ

裁判ハ之ヲ公行スルヲ以テ原則トシ其事件ノ公安ヲ害シ又ハ風俗ヲ亂スノ恐アル場合ノ外ハ傍聽ヲ禁シテ之ヲ密行スルヿナシ是レ人民ノ爲メニ保證シタル權利ニシテ共ニ國法ノ認ムル所ナリ（我憲法ニ於テハ第二十四條及ヒ第五十九條ニ明文アリ）

佛國通常裁判所

佛國裁判所ノ組織ハ大半行政上ノ組織ニ倣ヒタルモノトス現時ノ構成ニ據レハ各區ニ治安判事一名アリ各郡ニ始審裁判所（一名郡裁判所）一個アリ始審裁判所ノ上ニ控訴院二十六個所アリ全國ヲ合セテ一ノ大審院アリ

佛國特別裁判所

以上ハ通常裁判所トシ其外ニ特別裁判所ヲ設置ス即チ商事裁判所、工事裁判所、陸海軍裁判所アリ又臨時裁判所アリテ不時ニ開廷ス高等法院、元老院ノ如キ是レナリ

佛國司法權ノ組織

佛國司法ノ組織ハ從來各種ノ法律勅令ヲ以テ之ヲ規定シ整然秩序ヲ立テ編纂シタル裁判所構成法ナルモノナシ故ニ之ヲ講究スルニ當テハ其法令ヲ通覽スルニアラサレハ之ヲ知悉スルヿ能ハサルナリ

現今裁判所構成ノ因テ基ク所ハ共和第八年六月二十七日、千八百十年四月二日、千八百八十三年八月三十日ノ法律ニ在リテ之ニ各種ノ勅令及ヒ治罪法ノ明文ヲ加フルヿハ頗ル雜錯シテ一目瞭然タラサルノ憾アリ

以下大審院ヲ始メトシ順次諸裁判所ノ構成及ヒ權限ヲ畧述シ併セテ公吏、裁判所附屬吏ノ職掌ヲ概記スヘシ

一　大審院

大審院ノ職權

大審院ハ最高裁判所ニシテ法律ノ均一ヲ維持スルカ爲メニ設置スルモノトス該院ハ各局合同シテ控訴院ノ上ニ監督懲戒ヲ爲スノ權利ヲ有ス而シテ至重ナル原由アルニ於テハ裁判官ノ停職ヲ命シ或ハ其行爲ニ付キ辨明ヲ爲サシムルカ爲メニ之ヲ

司法大臣ノ面前ニ召喚スルヿヲ得又該院ハ千八百五十二年三月一日ノ勅令ニ從ヒ司法大臣ノ告發ニ依リ事ノ重大ニ渉ルトキハ終身官タル裁判官ニ對シ其權利ノ剝奪ヲ宣告スルヿヲ得

大審院ハ左ノ事項ニ付キ裁判ヲ有ス

一　控訴院及ヒ諸裁判所ニテ爲シタル終審ノ判決ニ對スル上告

二　公安ノ爲メ甲ノ控訴院裁判所ヨリ乙ノ控訴院裁判所ヘ事件ヲ移スノ訴

三　正當ナル嫌疑ノ爲メ甲ノ裁判所ヨリ乙ノ裁判所ヘ事件ヲ移スノ訴、但シ重罪、輕罪ニ付テハ何レノ場合ヲ區別セス民事ニ付テハ甲ノ控訴院ヨリ乙ノ控訴院ヘ移ス時ニ限ル

四、控訴院ノ評定官各員ニ對シ及ヒ始審裁判所ニ對シ損害賠償ヲ求ムルノ訴

五　數箇ノ控訴院ノ間又ハ同一控訴院ノ管轄ニ屬セサル數箇ノ始審裁判所ノ間ニ權限ノ爭ヲ生スルニ當リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴

大審院ハ訴訟ノ本案ニ立入リテ審理スルモノニアラザルヿ固ヨリ論ヲ俟タス其法式ヲ履行セス又ハ法律ニ違背シテ下シタル判決ヲ破毀シテ本訴ヲ控訴院又ハ原裁判所ニ移ス若シ其破毀シタル判決カ始審裁判所ヨリ出テタルモノナル片ハ始審ノ判決ナルト終審ノ判決ナルトヲ分タス最近ノ始審裁判所ニ之ヲ移ス又其控訴院ヨリ出テタルモノナル片ハ之ヲ最近ノ控訴院ニ移スモノトス

治安判事ノ終審ノ判決ニ對シテハ越權ノ處分アル片ノ外又陸海軍裁判所ノ判決ニ對シテハ、非軍人又ハ其職務ニ依リ法律ニ

於テ軍人ニ准セサル者ヨリ申立タル管轄違ノ原由アル片ノ外ハ上告ヲ爲スヿヲ得ス○公安ノ爲メ甲ノ控訴院、裁判所ヨリ乙ノ控訴院、裁判所ヘ事件ヲ移スハ檢事長ノ請求アルニアラサレハ之ヲ爲スヲ得ス

司法大臣ヨリ付與セラレタル命令ニ依リ大審院ノ檢事長カ法律ニ違背シタル裁判上ノ處分、言渡ヲ其院ノ刑事局ニ告發スルトキハ其處分、言渡ヲ取消シ且ツ必要ナル片ハ警察官又ハ裁判官ニ對シ起訴スルヿヲ得

若シ控訴院ノ評定官カ其職務外ニ於テ重罪、輕罪ヲ犯シタルノ訴ヲ受ケタルトキハ司法大臣ハ其豫審書類ヲ大審院ニ送付スル而シテ大審院ニ於テ必要ト認ムルトキハ其事件ヲ控訴院ニ移シ輕罪ニ係ルモノハ確定ノ判決ヲ下サシメ又重罪ニ係ルモノハ重罪ノ公判ニ付セシム

商事裁判所、輕罪裁判所又ハ始審裁判所ノ判事全員又ハ控訴院ノ評定官一員若クハ數員カ其職務ヲ行フニ當リ瀆職ノ刑又ハ更ラニ重キ刑ニ該ルヘキ重罪ヲ犯シタルノ訴ヲ受ケタル片ハ其告發狀ハ之ヲ司法大臣ニ提出スルヲ要ス而シテ司法大臣ニ於テ至當ト思料スル片ハ其告發狀ニ付キ大審院ニ起訴スヘキ旨ヲ檢事長ニ命令ス又此重罪ハ被害者ヨリ直チニ之ヲ大審院ニ訴フルヲ得ヘキモ其被害者カ裁判所若クハ裁判官ヲ相手取リテ損害賠償ノ訴ヲ起スカ又ハ大審院ニ於ケル未決ノ訴訟ニ附帶スル事件ニ係ル片ニ限ルモノトス○大審院ハ重罪公判ニ付スルノ可否ヲ評議シ而メ重罪公判ニ付スルヲ可トスル片ハ其裁判言渡書ニ之カ處分ヲ爲スヘキ重罪裁判所ヲ定ム又大審院ハ其受理スル事件ノ審理ニ於テ治安判事、輕罪裁判所又ハ始審裁判所ノ判事一員若クハ右裁判所ノ檢察官ニ對シ起訴スヘ

キ犯罪アルヿヲ發見シタル片ハ直接ノ告發又ハ附帶ノ告發ナキモ其重罪公判ニ付スルノ可否ヲ評決ス

破毀ノ言渡書ハ其判決ヲ破毀セラレタル控訴院又ハ原裁判所ノ簿冊ニ謄記シ且ツ毎月發行スル所ノ公報ニ掲載ス

大審院ノ檢事長ハ控訴院ノ檢事長ニ對シ監督ノ權ヲ有ス○同院ニ於テ檢察官ハ總テノ事件ニ付キ意見ヲ陳述スルモノトス

政府ニ關スル訴訟ニ就テハ行政廳ノ吏員管理者等ヨリ差出スル所ノ趣旨書ニ據テ其辨護ニ任ス

民事ニ於ケル上告ノ期限ハ佛國ニ住居スル者ニ付テハ本人又ハ住所ニ裁判言渡書ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ二箇月トス

○大審院ニ上告スルヲ得ヘキ缺席裁判ノ判決ニ係ル上告期限ハ止タ故障ノ申立カ受理スヘカラザルモノトナリタル日ヨリ起算ス○願訴局ノ受理裁定書ヲ本人若クハ住所ニ送達スル期限ハ其裁定書ノ日附ヨリ起算シ二箇月トシ裁判管轄ヲ定ムル訴ノ期限ハ一箇月トス

訴訟ノ本案ニ關セザル豫審裁判ニ對スル上告ハ確定裁判ノ後ニ非サレバ之カ申立ヲ爲スヿヲ得ス○上告ニ付テハ期限ノ猶豫ヲ許サヽルモノトス

重罪、輕罪、違警罪事件ニ付キ被告人ヨリ上告ヲ爲サントスル旨ヲ書記課ニ申立ルノ期限ハ其裁判言渡ヲ受ケタルヨリ三日トス

第一終審ノ裁判カ破毀セラレタル後チ同一ノ事件ニ付キ亦同一ノ當事者ノ間ニ下サレタル第二ノ裁判カ原裁判ト同一ノ趣意ニ因テ再ヒ上告セラルヽ片ハ大審院ハ各局聯合ノ會議ニ於テ之ヲ判決ス而シテ若シ第二ノ裁判ニシテ原裁判ト同一ノ理由ニ依リ破毀セラルヽ片ハ其事件ヲ移サレタル控訴院又ハ裁

判所ハ大審院ニテ判定シタル法律ノ點ニ付キ其裁決ニ從ハサルヘカラス

大審院ノ組織

大審院ハ國長ヨリ任命スル院長一名、局長三名、評定官四十五名ヲ以テ組織ス

大審院ヲ三局ニ分チ各其局長一名、評定官十五名ヲ以テ組織ス

○院長ハ民事局ニ首班スルヲ例トシ又各局ニ首班スルヲ得

○願訴局ハ破毀ノ上告又ハ裁判官ヲ相手取ル訴ノ受理却下ヲ裁定シ及ヒ裁判管轄ヲ定ムルノ訴、正當ナル嫌疑ノ爲メ甲ノ裁判所ヨリ乙ノ裁判所ヘ事件ヲ移スノ訴、控訴院又ハ裁判所ノ越權ノ處分取消ノ訴ヲ確定判決ス

民事局ハ訴狀ノ受理セラレタル件ニ於テ破毀ノ申立及ヒ裁判官ヲ相手取リタル訴ヲ審理シ及ヒ豫メ受理ノ手續ヲ要セスシテ公益ニ因由スル不動產徵收事件並ニ撰擧事件ニ係ル上告ヲ審理ス

刑事局ハ豫メ受理ノ手續ヲ要セスシテ重罪、輕罪、違警罪事件ニ係ル破毀ノ申立ヲ審理ス

各局ハ評定官十一名以上出席スルニ非サレバ裁判ヲ爲スヿヲ得ス其判決ハ都テ投票ノ過半數ニ依ル可否平分スル件ハ更ラニ五名ノ評定官ヲ加ヘテ之ヲ決ス五名ノ評定官ハ先任ノ順序ニ從ヒ先ツ其訴訟事件ノ評議ニ干預セサリシ局員中ヨリ之ヲ採リ次ニ他ノ局員ヲ以テ之ヲ補フ

其他大審院ニハ檢事長一名、代言長六名、書記長一名、書記補四名及ヒ檢事局附書記長一名ヲ置キ書記屬ハ書記長ヨリ之ヲ大審院ニ推擧シテ宣誓ヲ爲サシム但シ書記長ハ該院ノ認許ヲ得ルニ非レバ書記屬補ヲ免黜スルヿヲ得ス

大審院ノ職員ニ任セラルヽニハ下級ノ裁判所ヨリ漸次進級

シテ之ニ至リ直チニ其地位ニ登庸セラルヽヿナキヲ本則トス其代言人又ハ法律博士ニシテ直チニ評定官、檢事ニ任セラルヽヿアルハ變則ニシテ甚タ稀ニ在ル所ナリ控訴院ニ於ケルモ亦同シ

二　控訴院

佛國控訴院ノ數

現今佛國ニハ二十六箇所ノ控訴院アリ之ヲ三級ニ分ツ卽チ第一級ハ巴里ノ控訴院ニシテ一箇所トス第二級ハ四箇所、第三級ハ二十一箇所トス（其地名ハ畧之）

控訴院ノ組織

控訴院ハ下級裁判所ノ判決ニ服セスシテ上訴スルモノヲ審判シ其各局ニ於テ該職掌ヲ分擔スル〓下ニ記述スルカ如シ

控訴院ノ職權

控訴院ノ裁判官ハ大統領之ヲ任命シ評定官ト稱ス其員數ハ各院異同アリト雖モ大抵院長ヲ合セテ二十四名以上トス

各控訴院ニハ院長一名及ヒ其局數ニ應シテ局長數名ヲ置ク○各局ノ數ハ民事局輕罪控訴局及ヒ重罪控訴局各々一個トス但シ民事局ハ二個以上設クルモノアリ

民事局ハ始審裁判所及ヒ商事裁判所ノ判決ニ對スル控訴、重罪控訴局ハ輕罪裁判所ノ判決ニ對スル控訴ヲ審判シ重罪公訴局ハ重罪被告人ヲ重罪裁判所ニ移スヤ否ヤヲ判決ス○其他控訴院ニハ休暇中休暇部ナルモノヲ設ケテ急速事件ヲ裁判セシム」

重罪ノ裁判

重罪ヲ裁判スルハ控訴院ノ管轄ニ屬シ則チ控訴院ノ評定官ハ其院所在ノ市府ニ於テ重罪裁判所ヲ組成シ及ヒ其管內ノ諸州ニ於テ重罪裁判長トナルノ委任ヲ受ク○重罪裁判長ハ司法大臣之ヲ任命シ仝裁判所ニ於ケル陪席判事ハ控訴院長ノ指定スル所ニ係ル

陪審

重罪裁判所ノ職員ハ裁判長一名、判事二名、人民中ヨリ抽籤法ヲ用ヰテ選拔シタル陪審十二名トス

陪審ハ英國ノ制度ニ則リタルモノニシテ十二名ノ人民ヨリ成リ重罪裁判ニ於テ被告人ノ有罪無罪ヲ決シ酌量減輕ノ情狀アルヤ否ヲ判スルノ職務ヲ有スルモノトス故ニ事實ノ裁判官ニシテ頗ル重要ノ任ヲ帶フルモノナレハ公權ヲ有スル者ニ非サレハ之ニ選任セラルヽヿヲ得ス佛國ニ於テハ千七百九十一年以降法律ヲ以テ組織シ爾來種々ノ論駁ヲ受ケタルニ拘ハラス多少ノ改正ヲ經テ今日マテ存在スルニ至レリ陪審ハ刑法ノ學術上ヨリ論シ人民自ラ裁判ヲ下スヿニ付キ批難ヲ免カレサル所ニシテ亦其斷言ノ屢々寛ニ失シ刑罰ノ効ヲ微弱ナラシメ時ニ全ク有罪者ヲシテ不問ニ措カルヽニ至ラシムルヿアリ嗚呼陪審ノ制タル裁判上被告人ヲ保護スルノ主意ニ出テ却テ實際其弊ヲ感スルヿ多キカ故ニ他日其制ノ一變スルカ或ハ全ク裁判上ニ跡ヲ絶ツニ至ラン

重罪裁判所ハ設ニアラズ

此裁判所ハ常設ノモノニアラスシテ通常三箇月ゴトニ之ヲ開キ又臨時開廳スルヲ必要トスル片ハ控訴院長ヨリ之ヲ命ス

其他控訴院ハ特別ノ規定ニ因テ數多ノ職掌ヲ付與セラル

民事局ハ評定官七名出席スルニ非レハ判決スルヿヲ得ス又輕罪控訴局及ヒ重罪公訴局ハ評定官五名出席スルニ非レハ判決スルヿヲ得ス

控訴院ノ檢察官ハ檢事長一名、代言長數名、檢事長補數名ヨリ成リ其職掌ハ始審裁判所ノ檢察官ト同一ナリ

各控訴院ニハ書記長一名及ヒ事務ノ繁簡ニ從ヒ書記屬數名ヲ置ク但書記補ト雖モ宣誓ノ後ニアラサレハ其職務ニ就クコト能ハサルモノトス

三　始審裁判所　又郡裁判所

始審裁判所ハ各郡ニ一箇所ヲ置ク此裁判所ハ判事補及ヒ檢事、

設置ノ數

檢事補幷ニ書記、書記補ヲ以テ組織ス

職權

始審裁判所ハ民事ニ於ケル普通法ノ審司ニシテ特別ノ法律ヲ以テ他ノ裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノヲ除クノ外萬般ノ訴訟皆ナ此裁判所ヲ經由スルモノトス

民事

始審裁判所ハ民事ニ於テハ唯タ治安判事ノ管轄ニ屬スヘキモノト商事裁判所々在ノ郡ニ於ケル商事トヲ除キ始審ニテ總テノ人權、物權及ヒ混同ノ訴訟ヲ審判ス又治安判事ノ言渡ニ對スル控訴ヲ判決シ始審及ヒ終審ニテ價額千五百法ヲ超過セサル人權及ヒ動產物件ニ係ル總テノ訴訟並ニ一定ノ收入額五十法ニ係ル不動產ノ物上訴件ヲ審判ス

刑事

刑事ニ於テハ始審裁判所ハ輕罪事件ヲ審判ス此場合ニハ之ヲ稱シテ輕罪裁判所ト云フ又違警罪裁判所ノ判決ニ對スル控訴ヲ審判ス

資格

始審裁判所ノ判事、檢事又ハ書記トナルニハ年齡二十五歲以上タルヲ要ス但シ檢事補ハ年齡三十二歲ナルモ妨ケナシ其他判事、檢事及ヒ檢事補ハ法學士ニシテ且ツ控訴院ニ於テ宣誓ヲ爲シタル後チ引續キ二年間代言人ノ職業ヲ營ミタル者ナルヲ要ス」

組織

判決ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲サヽルヘカラス

始審裁判所判事ノ人員ハ市府ノ人口ト事務ノ繁簡トニ從ヒ異同アリト雖モ三名ヨリ寡ナキヿヲ得ス而シテ所長、副所長及ヒ豫審判事ヲ合セテ通常四名以上十二名以下トス

三名又ハ四名ノ判事ヲ以テ組織スル始審裁判所ハ止タ一局ヲ設ケ判事補三名ヲ置ク、七名乃至十名ノ判事ヲ以テ組織スル始審裁判所ハ二局ニ分チ判事補四名ヲ置ク但シ二局中其一局ハ民事訴訟ヲ審理シ他ノ一局ハ輕罪訴訟ヲ審理ス又十二名ノ判事ヲ以テ組織スル始審裁判所ハ三局ニ分チ判事補六名ヲ置ク

而シテ第一第二局ハ民事訴訟ヲ審理シ第三局ハ輕罪訴訟ヲ審理ス

會議局

會議局ハ民事ニ於テハ或ル事件就中結婚シタル婦女ニ起訴スルヿヲ認可スル請求ノ當否ヲ判定シ刑事ニ於テハ輕罪公判ニ付スルノ當否ヲ判定ス

始審裁判所ニシテ重罪廳トナルヿアリ一般ニ州廳所在地ニアルモノヲ以テ之ニ充ツ

四　治安裁判所

判事職權

各區ニ治安判事壹名ヲ置ク該判事ハ終身官ニアラサルモノトス○治安判事トナルニハ年齡三十歳以上ノ者タルヲ要ス○各治安判事ハ書記一名ノ補助ヲ受クルモノトス但其書記ハ年齡二十五歳以上ノ者タラザルヘカラス

治安判事ハ民事、刑事ニ付キ其職務ヲ行フ民事ニ付テハ治安判事ハ或ハ裁判官トナリ或ハ勸解役トナリテ各種ノ非訟事件ヲ取扱ヒ又ハ之ニ干預ス

刑事

刑事ニ付テハ治安判事ハ違警罪裁判所ヲ構成シ及ヒ司法警察官トナル

民事

民事ニ於テハ治安判事ハ單獨裁判官トシテ其全區内ニ於テ百法ノ價格ニ至ル迄ハ終審ニテ、二百法ノ價額ニ至ル迄ハ始審ニテ純粹ノ人權又ハ動產上ノ總テノ物件ニ係ル訴訟ヲ裁判ス

治安判事ノ終審判決權

又治安判事ハ左ノ事項ニ付キ百法ノ價額ニ至ル迄ハ終審ニテ裁判シ其以上ノ價額ニ昇ルヿハ始審ニテ裁判ス

一　年々ノ貸借四百法ヲ超過セサルヿニ於テ家屋又ハ貸賃ノ辨濟ニ係ル訴訟、家屋ノ明渡、其貸賃ヲ辨濟セサルニ因リ賃貸契約ノ解除、場所ノ退去及ヒ賃借人ノ物品差押ニ關スル訴訟

二　田野、果實及ヒ收獲物ニ加ヘタル損害賠償ニ係ル訴訟、所有權及ヒ土地ノ義務ニ付キ爭訟アルザルトキニ於テ樹木又ハ生籬ノ伐枝及ヒ溝渠若クハ所有地ノ灌漑ニ供シ又ハ器械ノ運轉ニ供スル用水路ノ浚渫ニ係ル訴訟

三　法律ヲ以テ家屋賃借人及ヒ土地賃借人ノ負擔ニ屬セシメタル修繕ニ係ル訴訟

四　職工、年期、徒弟、僕婢、日雇、月雇、若クハ年雇ノ勞働者ト雇主トノ契約ニ係ル訴訟

五　乳母ノ給金辨濟ニ係ル訴訟

六　口頭ノ誹毀、讒謗、諍鬪及ヒ暴行ニ對スル民事上ノ訴訟

其他治安判事ハ百法ノ價額ニ至ル迄ハ終審ニテ左ノ訴訟ヲ裁判ス

一　旅店主及ヒ貸家主ト旅人又ハ借家人トノ間ニ起リタル止宿料及ヒ旅店ニ預ケタル荷物其他ノ物件ノ損失ニ係ル訴訟

二　旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル遲滯、賃銀及ヒ旅人ノ携帶スル物件ノ損失ニ係ル訴訟

三　旅人ト車匠其他工匠トノ間ニ起リタル供給品、給金及ヒ馬車ニ加ヘタル修繕ニ係ル訴訟

四　賠償權ノ爭ハレサル時ニ於テ無享有ノ爲メニ賃借人ヨリ求メタル賠償

五　民法第二千七百三十二條及ヒ第千七百三十五條ニ記載シタル場合ニ於ケル毀損及ヒ紛失

治安判事ハ右ノ外始審ニテ左ノ事項ヲ裁判ス

一　一年內ニ所有地ノ灌漑ニ供シ又ハ機械及ヒ水車ノ運轉ニ供スル水路上ニ爲シタル工作

治安判事ノ始審事項

二　占有又ハ占有取戻ノ訴

三　立界ノ訴並ニ樹木生雛植付ノ距離ニ關スル訴

四　民法第六百七十四條ニ掲ケタル建築及ヒ工事ニ關スル訴

五　民法第二百五條、第二百六條、第二百七條ニ因テ起シタル年々百五十法ヲ超過セサル養育料ニ係ル訴訟

治安判事ハ仍ホ關稅事件ニ係ル犯則ヲ審判ス○始審裁判所々在地ニアラサル治安判事ハ始審裁判所長ト相幷ンテ其區內ニ住居スル公證人ノ署名及ヒ之ニ附屬スル身分證書取扱役ノ署名ヲ確認スルヿヲ得

訴訟法第四十八條、第四十九條其他ノ法律ニ記載シタル例外ヲ除クノ外法律ニ定メタル場合ニ於テハ始審裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニシテ勸解ニ付スルヲ得ヘキモノハ之ヲ治安判事ニ

勸解

訴フルモノトス

治安判事ノ管轄ニ屬スル事件ハ亦其急速ヲ要スルモノヽ外裁判上ノ手續ヲ以テ審判スル前通知書ニ基テ之ヲ勸解ス

非訟事件

非訟事件ニ於テハ治安判事ニ種々ノ職掌アリ就中親族會議ヲ招集シ及ヒ之ニ上席スルヿ、死亡後又ハ家資分散ノ場合ニ於テ封印ヲ施シ及ビ之ヲ除去スルヿ數多ノ場合ニ於テ公證人ノ證書、養子證書及ヒ後見證書ヲ作ルヿ並ニ公證人及ヒ身分證書取扱役ノ署名ヲ確認スルヿ等ヲ掌ル

司法警察官トノ治安判事ノ職務

刑事ニ於テハ治安判事ハ司法警察官トシテ行フ所ノ職務ノ外（治罪法第四十八條以下）左ノ事項ヲ審判ス

一　區ノ首地內ニ於テ犯シタル違警罪

二　其區內ノ他ノ町村ニ於テ犯シタル違警罪但シ現行犯罪ノ場合ヲ除キ町村內ニ在住セサル者ガ違警罪ヲ犯シ又

ハ陳述ヲ爲ス可キ證人カ町村内ニ在住セサル片ニ限ル

三　原告人カ其損害賠償トシテ確定ニアラサル金額、又ハ十五法ヲ超過スル金額ヲ受ケタル違警罪

四　人民ノ請求ニ因テ起訴セラレタル森林ニ關スル違警罪

五　公然ノ罵詈

六　占夢ヲ職業トスル者ニ對スル訴訟

治安判事ハ其區内ノ各町村ニ於テ犯シタル他ノ違警罪ニ付キ違警罪裁判所ノ設置セラレタルトキ其邑長ト相幷ンテ之ヲ審判ス但シ刑法又ハ特別ノ法律ニ於テ一法以上十五法以下ノ罰金一日以上五日以下ノ禁錮ニ處スル所ノ各犯罪ハ之ヲ違警罪ト看做スモノトス

公吏、裁判所附屬吏

公證人

公證人ノ性質

公證人ハ人民ノ契約ヲ爲スニ付キ其囑托ニ應シテ公正ノ法式ニ據ルヘキ證書ヲ作ルノ任ヲ有スル公吏ニシテ最モ緊要ナル職務ヲ帶フルモノトス

人員

其人員ハ政府ニ於テ之ヲ定メ人口十萬以上ノ市ニ於テハ六千人ニ付キ一人ノ割合ヲ以テ之ヲ置キ其他ノ市町村ニ於テハ各治安裁判所管轄區域内ニ二人以上五人以下ヲ置クモノトス

役場

○公證人ノ役場ハ其死去、免職若クハ辭職ニ因ルニアラサレハ之ヲ廢スルヿナシ○公證人ハ法律ニ定メタル身元保證金ヲ納ムルヿヲ要シ而シテ其金額ハ專ラ其職務ニ關スル犯則又ハ過失ニ依リテ科徵セラルヘキ罰金、損害賠償ノ擔保ニ供ス○公證人ハ其相續人ヲ推薦シテ國長ノ認可ヲ經レ𪜈其實自ラ之ヲ選

身元保證人

相續人

定スルモノニシテ其職務ヲ賣買スルヲ得ルカ故ニ一種ノ株主タルニ異ナラス○公證人ヲ分ツテ三等ト爲ス一等公證人ハ控訴院所在ノ市府ニ在リテ其控訴院ノ全管内ニ於テ事務ヲ取扱フノ權ヲ有シ二等公證人ハ始審裁判所々在ノ市府ニアリテ其裁判所ノ全管内ニ於テ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス三等公證人ハ控訴院及ヒ始審裁判所ノ設ケアラサル市村ニ置クモノニシテ其住居スル區ノ區域内ニアラサレハ事務ヲ取扱フヿヲ得ス○公證人ハ終身其職ニ任セラルヽモノニシテ裁判宣告ニ依ルニアラサレハ免職又ハ停職セラルヽヿナシ(現今ハ共和國大統領之ヲ任命ス)而シテ就職前宣誓スルヲ例トス○公證人ト爲ルニ必要ナル資格ハ左ノ如シ

終身職

資格

一　公民權ヲ享有スルヿ

二　徵兵令ヲ遵守シタルヿ

三　滿二十五歳以上タルヿ

四　法律ニ定メタル期限間職務見習ヲ爲シタルヿ

五　公證人紀律局ヨリ交付セラレタル品行證書及ヒ適任證書ヲ所持スルヿ

無給

手數料

公證人ハ政府ヨリ給料ヲ受ケス其囑托者ヨリ謝金(手數料)ヲ受クルモノトス其謝金ノ額ハ概シテ公證人ノ取扱ヒタル證書ノ種類及ヒ其費シタル時間等ニ應シ囑托者トノ示談ヲ以テ之ヲ定メ若シ其示談ノ調ハサルトキハ紀律局ニ申立テ其意見ニ基キ公證人住地ノ始審裁判所長ニ於テ之ヲ決シ其要求ヲ過當ナリト認ムル片ハ之ヲ減額スルヿヲ得其他公證人ハ民事裁判費用規則ニ定メタル割合ニ從ヒ謄本料、旅費等ヲ受クルノ權アリ」

紀律局

各始審裁判所々在ノ地ニハ一個ノ紀律局ヲ置キテ全管内ヲ管轄セシメ而シテ其局員ハ公證人ノ總會議ニ於テ之ヲ撰擧ス、巴

里ノ紀律局ハ十九名ヲ以テ組織シ自餘ノ紀律局ハ管内ノ公證人五十名以上ナレハ九名、五十名以下ナレハ七名ヲ以テ組織ス紀律局員ハ局長、理事、報告員、書記及ヒ司計各々一人ヲ互選ス

紀律局ノ權限

紀律局ハ事ノ輕重ニ從ヒ公證人ニ左ノ懲罰ヲ科ス即チ告戒、譴責、議決權ノ剝奪並ニ紀律局及ヒ總會議ニ干預スルノ禁止是ナリ

代訟人

代訟人ノ性質

代訟人ハ裁判所ニ對シ原被兩造ヲ代表シ之カ爲メ諸般ノ訴訟手續ヲ爲スモノニシテ控訴院附屬ノ代訟人モ始審裁判所附屬ノ代訟人モ共ニ其職務ノ異ナルヿナシ○何人ヲ論セス年齡二十五歲以上ニシテ法律學ノ卒業證書ヲ有シ而シテ法律規則ニ定メタル職務ノ見習ヲ爲シタル者ニアラサレハ代訟人ト爲ルヿヲ得ス○代訟人ハ其業務ヲ營ムヘキ控訴院又ハ裁判所ノ推

資格

薦ニ因リテ共和大統領ヨリ任命セラルヽモノトス而シテ控訴院又ハ裁判所々在ノ市府ニ於テ本籍ヲ有スルヲ要シ且ツ其就職前宣誓ヲ爲サヽルヘカラス○代訟人ハ民事ニ於テ必ス其職務ヲ執ルモノトシ之ヲ拒絕スルヿ能ハサルヲ通則トス○代訟人法律學士ノ學位ヲ有スルヰハ其擔當スル所ノ總テノ事件ニ於テ訴訟手續ヲ爲スモ法律學士ノ學位ヲ有セサルヰハ唯タ首府ニ於テ現ニ營業シ又ハ住居ヲ有シテ代言人名簿ニ登記セラレタル者若クハ代言人見習ノ人員カ事務ノ捗取ノ爲メ不足ナリト見做シタル裁判所ニ非サレハ出訴スルヿヲ得ス○代訟人ハ其擔當スル所ノ訴訟ニ關スル總テノ附帶事件ニ付キ其手續ヲ爲スヿヲ得又簡畧事件ニ付キ控訴院ニ對シ又ハ控訴院、重罪裁判所及ヒ州廳所在地ニアル始審裁判所ニ對シ訴訟手續ヲ爲スヿヲ得○代訟人ハ其取締及ヒ懲戒ニ關シ各控訴院及ヒ裁判

職務

出訴

職權

紀律局ノ管轄

所ノ側ニ設置スル規律局ノ管轄ヲ受ク該局ノ組織及ヒ權限ハ共和第九年三月十三日及ヒ千八百十六年七月十七日ノ勅令ヲ以テ之ヲ定ム○代訟人ハ身元保證金ヲ納メ其相續人ヲ推薦シテ國長ノ認可ヲ受クルノ權ヲ有ス○代訟人ハ成規ニ定メタル給與ノ外他ニ徵收ヲ爲スヿヲ得ス若シ當事者ニ於テ其請求ヲ過當ナリト思料スル片ハ裁判所長ニ申立テ所長自ラ又ハ特ニ委任ヲ受ケタル判事其額ヲ定ムルモノトス○商事裁判所ニハ代訟人ナシ各當事者ハ自ラ其事件ノ辨護ヲ爲シ又ハ代人ヲ選定シテ之ヲ爲サシム

身元保證金
報酬
商事裁判所ニ代訟人ナシ

評價人

評價人ハ千八百一年三月十八日及ヒ千八百十六年四月二十八日ノ法律ニ據テ設定セラレタルモノニシテ動產ノ評價及ヒ其公賣ヲ爲スヿヲ掌ル○評價人ハ郡廳所在地ナル市府又ハ始審裁判所々在地ナル市府若クハ人口五千以上ノ市府ニアラサレハ之ヲ置クヿヲ得ス而シテ評價人ナキ地方ニ於テハ公證人書記使吏ニ其職掌ヲ委セラルヽモノトス○評價人タルニ付キ法律上要スル所ノ條件ハ年齡二十五歲以上タルニ在リ而シテ司法大臣ノ上申ニ因テ共和大統領ヨリ任命セラルヽモノニシテ其相續人ヲ推薦シテ國長ノ認許ヲ受クルノ權アルヿ他ノ公吏ニ同シ而メ又始審裁判所ニ於テ宣誓ヲ爲スモノトス○評價人ハ身元保證金及ヒ營業稅ヲ納ムルヲ要シ其手數料ハ法律ヲ以テ定メラル○民事裁判所各管內ニハ一箇ノ紀律局アリテ其取締ヲ爲シ且ツ共有資金局アリテ評價人ハ其手數料ノ半額ヲ拂込ムモノトス

評價人ノ性質
評價人ヲ置ク所
資格
身元保證金營業稅
紀律局

使吏

使吏ハ各裁判所ニ於テ召喚狀ヲ送達シ書類及ヒ言渡書ヲ送附

使吏ノ性質

資格

執行スルヿヲ掌ル各治安裁判所、始審裁判所、控訴院及ヒ大審院ニハ一定ノ員數ノ使吏ヲ置ク○使吏タルニハ年齡二十五歲以上ニシテ代訟人事務所、公證人事務所又ハ使吏事務所ニ於テ二年間、裁判所書記課ニ於テ三年間其事務ヲ見習ヒ且ツ紀律局ヨリ得タル品行證書及ヒ適任證書ヲ所持スルヲ要ス○使吏ハ司法大臣ノ上申ニ因テ共和大統領之ヲ任命ス而シテ其附屬スル各裁判所ノ管内ニアラサレハ職務ヲ行フヿヲ得ス○各裁判所ニテハ毎年訟廷使吏ヲ命シ專ラ訟廷ノ事務ヲ取扱ハシメ原被告ヲ呼出ス等ノ事ヲ掌ラシム右使吏ハ特ニ代訟人ヨリ代訟人ニ宛テタル書類ヲ送達スル方ノ權ヲ有ス○評價人ノアラサル地方ノ使吏ハ前ニ述ヘタルカ如ク公證人及ヒ書記ト同シク動產ノ評價及ヒ公賣ヲ取扱フモノトス○使吏ハ身元保證金及ヒ營業稅ヲ納ムルヲ要シ規則ニ定メタル手數料ヲ受ク而メ其相

任命

職權

身元保證金營業稅

續人ヲ推薦シテ國長ノ認許ヲ受クルヲ得ルヿ自餘ノ公吏ニ同シ○各郡ニハ紀律局一箇所アリテ使吏ノ取締ヲ爲シ且ツ其職業ニ關スル法律規則ノ執行ヲ監視ス又共有資金局アリテ其經費ヲ補充スルニ供ス

紀律局

書記

書記ハ裁判所ノ職員ニ屬シ判決文裁判言渡書ヲ記シ其正本ヲ保存シ副本ヲ交付スルヿヲ掌ル各裁判所ニ書記長一名アリテ數名ノ書記屬ノ補助ヲ以テ其事務ヲ取扱フ○書記ハ司法大臣ノ上申ニ因テ共和國大統領之ヲ任命シ其職務ハ無給ニシテ規則ニ定メタル手數料ヲ受クルノ權アリ而シテ亦他ノ公吏ノ如ク自ラ其相續人ヲ推薦シテ國長ノ認可ヲ受クルヿヲ得○評價人ノアラサル地方ニ於テハ治安裁判所ノ書記ハ動產ノ公賣ヲ取扱フヿヲ得書記ハ前記職掌ノ外ニ其附屬スル裁判所ノ會計

書記ノ性質

任命

無給

手數料

職務

事務ヲ分擔スルナリ

裁判所構成改正ニ關スル法律

第一條　控訴院ニ於テ各事件ヲ判決スルハ奇數ノ裁判官ノ評議スル所ニ依ル

控訴院ノ判決

右判決ハ上席人ヲ合セテ五名以上ノ裁判官之ヲ行フ

若シ或ル事件ノ審問ニ列席スル評定官偶數ナルトキハ拜命ノ順序ニ從ヒ末席ノ者出席ヲ見合スヘシ

正式ノ公判ニ付セラル可キ訴訟ノ裁判ハ九名以上ノ裁判官之ヲ行フモノトス

以上ノ規定ニ違背シタル判決ハ總テ無効トス

控訴院ノ組織

第二條　各控訴院ハ此法律ニ添ヘタル甲表（此表ハ署ス）ニ定メタル數局ヲ有シ且ツ院長ノ外同表ニ定メタル局長及ヒ評定官若干名ヲ以テ之ヲ組織ス

○控訴院ハ右表ニ定メタル數局ノ外ニ尚ホ千八百八十年六月十二日ノ布令ニ據テ設定スル重罪公訴局ヲ有ス

各控訴院ノ側ニハ甲表ニ定メタル人員ヲ以テ撿事長、代言長撿事長、補書記長及ヒ書記補ヲ置ク

事務上必要アル場合ニ於テハ行政規則ヲ以テ臨時一局ヲ設置シ他ノ數局ヨリ撰拔スル所ノ評定官ヲ以テ之ニ充ルヿヲ得ヘシ

甲表ニ從ヒ撿事長補一名ノミヲ置ク所ノ控訴院ニ於テハ前同上ノ條件ニ從ヒ更ラニ一名ノ撿事長補ヲ置クヿヲ得

巴理府ノ控訴院法官ノ俸給

第三條　巴里ノ控訴院ヲ除タノ外自餘ノ控訴院ハ皆ナ一樣トシ等級ノ區別ハ總テ之ヲ廢止ス

控訴院ヲ組織スル法官ノ俸給ハ左ノ如シ

巴里ノ控訴院

院長	二五、〇〇〇法
局長	一三、七五〇法
評定官	一一、〇〇〇法
檢事長	二五、〇〇〇法
代言長	一三、二〇〇法
檢事長補	一一、〇〇〇法
書記長	八、〇〇〇法
書記補	五、〇〇〇法
自餘ノ控訴院法官ノ俸給	
院長	一八、〇〇〇法
局長	一〇、〇〇〇法
評定官	七、〇〇〇法
檢事長	一八、〇〇〇法
代言長	八、〇〇〇法
檢事長補	六、〇〇〇法
書記長	四、〇〇〇法
書記補	三、五〇〇法

第四條　始審裁判所ノ判決ハ奇數ノ裁判官ノ評議スル所ニ依ル

右判決ハ三名以上ノ裁判官之ヲ行フ若シ或ル事件ノ審問ニ列席スル判事偶數ナル片ハ拜命ノ順序ニ從ヒ末席ノ者出席ヲ見合ス可シ

以上ノ規定ニ違背シタル判決ハ總テ無効トス

第五條　始審裁判所ハ此法律ニ添ヘタル乙表（此表ハ署ス）ノ定ムル所ニ從テ之ヲ組織ス

其他事務上必要アル場合ニ於テハ參議院ノ議ヲ經タル布令

ヲ以テ重罪裁判所々在地ノ始審裁判所ニ於テ更ニ一名ノ裁判官ヲ增置スルヿヲ得

○又各始審裁判所ニ於テハ事務上必要アル片ハ前同上ノ條件ニ從ヒ檢事補一名ヲ增置スルヿヲ得

第六條　檢事長ハ事務上必要アル場合ニ於テハ一名ノ檢事補又ハ判事補ヲシテ控訴院ノ管內ニ在テ其駐在地外ナル裁判所ノ檢察官ノ職務ヲ行ハシムルヿヲ得可シ

第七條　[セーヌ]州始審裁判所テ除クノ外各始審裁判所ハ三等ニ區別ス

始審裁判所職員ノ俸給

始審裁判所職員ノ俸給ハ左ノ如シ

(第一)巴里始審裁判所	
所長	二〇、〇〇〇法
副所長	一〇、〇〇〇法
豫審判事	一〇、〇〇〇法
判事	八、〇〇〇法
檢事	二〇、〇〇〇法
檢事補	八、〇〇〇法
書記長	六、〇〇〇法
書記補	四、〇〇〇法
(第二)人口八萬以上ヲ有スル市府ノ始審裁判所	
所長	一〇、〇〇〇法
副所長	七、〇〇〇法
豫審判事	六、五〇〇法
判事	六、〇〇〇法
檢事	一〇、〇〇〇法
檢事補	五、〇〇〇法

人口八萬以上ノ市府

書記　二、四〇〇法
書記補　三、〇〇〇法

「ニツス」始審裁判所及ヒ「ヴエルサイユ」始審裁判所ハ法官俸給ノ點ニ於テ人口八萬以上ヲ有スル市府ノ始審裁判所ニ准ス

人口二萬以上ノ市府

(第三)人口二萬以上ヲ有スル市府ノ始審裁判所

所長　七、〇〇〇法
副所長　五、五〇〇法
豫審判事　五、〇〇〇法
判事　四、〇〇〇法
檢事　七、〇〇〇法
檢事補　三、五〇〇法
書記　一、五〇〇法

書記補　二、五〇〇法

「シヤンベリー」始審裁判所ハ法官俸給ノ點ニ於テ人口二萬以上ヲ有スル市府ノ始審裁判所ニ准ス

自餘ノ市府

(第四)自餘ノ市府ニアル始審裁判所

所長　五、〇〇〇法
副所長　四、〇〇〇法
豫審判事　三、五〇〇法
判事　三、〇〇〇法
檢事　五、〇〇〇法
檢事補　二、八〇〇法
書記　一、二〇〇法
書記補　二、〇〇〇法

アルジーエルノ始審裁判所法官ノ俸給

第八條　「アルジェール」(アルジエリノ首府)始審裁判所ハ法官俸給ノ

點ニ於テ人口八萬以上ヲ有スル市府ノ始審裁判所ニ准ス

「コンスタンチーヌ」「チランン」「ブリダ」「ボーヌ」及ヒ「トレムセン」ノ始審裁判所職員ハ佛國內地ニ於テ人口二萬以上ヲ有スル市府ノ始審裁判所職員ト同額ノ俸給ヲ受ク

「バトナ」「ブウヂー」「ゲルマ」「マスカラ」「モスタガヂン」「オルレアンヴエル」「ヒリップヴイル」「セチーフ」「シヂベル、アベー」及ヒ「チジウーヅ」ノ始審裁判所法官ノ俸給ハ左ノ如シ

所長	六、〇〇〇法
豫審判事	四、三〇〇法
判事	三、七五〇法
檢事	六、〇〇〇法
檢事補	三、五〇〇法

「アルジエリー」ノ諸裁判所詰判事補、同殖民地ノ裁判管轄ニ屬

スル回教徒ノ陪席判事及ヒ譯官ノ俸給ヲ定ムル法律、勅令、命令ハ舊ニ依テ之ヲ適用ス

此裁判所書記ノ現今ノ俸給ハ毫モ之ニ變更ヲ加ヘスト雖モ書記補ノ俸給ハ五百法ヲ增加ス

治安判事ノ俸給及商事裁判所ノ書記

第九條　治安判事ノ俸給及ヒ商事裁判所書記ノ俸給ハ追テ之ヲ改正スルマテハ從前ノ規定ニ據ルモノトス

第十條　本官タルト補官タルトヲ分タス裁判官ニシテ原被兩造ノ一方ヲ代表スル代言人若クハ代訟人中第三等迄ノ親屬若クハ姻屬ヲ有スル片ハ控訴院又ハ諸裁判所ヲ構成スルヿヲ得ス若シ此規定ニ違背シテ構成シタルモノハ總テ其裁判ヲ無効トス

親屬若クハ姻屬ノ故障

第十一條　此法律發布ノ日ヨリ三箇月ノ期限內ニ前數條ニ定メタル規定ヲ適用シ以テ控訴院及ヒ諸裁判所ノ人員ヲ沙汰スベキ人員

沙汰スベキ人員

ス可シ

此減員ハ全体ノ人員ニ及ホシ區別スルヿナシ

此官制ニ於テ維持セラレサル者ト新ニ受ケタル官職ニ就クヿヲ承諾セサル者トヲ分タス沙汰スヘキ人員ハ廢官ノ數ヲ超過スルヿヲ得ス

何レノ裁判管轄ニ屬スルヲ問ハス千八百五十一年十二月以後立會裁判ノ委員ニ列シタル法官ハ總テ維持セラレサルモノトス

退職恩給

第十二條　此法律ニ據リ維持スヘカラサル法官又ハ新ニ受ケタル官職ニ就クヿヲ承諾セサル法官ハ退職恩給ノ名義ヲ以テ左ノ金額ヲ受ク

在職二十年以上三十年以下ノ者ハ其最終六年間ニ受ケタル平均俸給ノ半額

在職十年以上二十年以下ノ者ハ其最終六年間ニ受ケタル平均俸給額ノ五分ノ二

在職六年以上十年以下ノ者ハ其最終六年間ニ受ケタル平均俸給額四分ノ一

在職六年以下ノ者ハ其就職以來受ケタル俸給額ノ五分ノ一

千八百五十二年三月一日ノ勅令ニ定メタル年齡ニ達スルマテ在職シタルモ千八百五十三年六月九日ノ法律第五條ニ因リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ享有スル能ハサル法官及ヒ特別ニ退職恩給ヲ受クルカ爲メ同法第十一條ノ末項ヲ援用スル能ハサル者ハ前段ノ規定ヲ適用スルノ限ニ在ラス

○此法官ニハ右年齡ニ達スルマテ年々同上ノ基礎ニ據テ計算シタル手當ヲ支給スヘシ

新官制ニ於テ維持セラレサル法官ニシテ在職三十年以上ノ者ハ其年齢ノ如何ニ拘ラス在職一年ヲ增スコトニ其退職恩給料ノ平均額六十分ノ一ヲ受クルノ權ヲ有ス

○何レノ場合ニ於テモ前項ノ規定ニ從ヒ支給スルノ恩給及ヒ手當ハ千八百五十三年六月九日ノ法律ニ定メタル最高額ヲ超過スルヿヲ得ス

高等會議

第十三條　大審院ハ法官高等會議ヲ組織ス

○大審院ハ各局聯合シテ以テ其資格ニ因リ裁定ヲ爲スヿヲ得

大審院ノ檢事長ハ高等會議ニ於テ政府ヲ代表ス

第十四條　法官高等會議ハ大審院長、控訴院長、局長、評定官、始審裁判所長、副所長、判事、判事補、治安判事ニ對メ共和第十年十一月十六日ノ元老院議定律同第八十二條、千八百十年四月二十

懲戒處分

日ノ法律第七章及ヒ千八百五十二年三月一日ノ勅令第四及ヒ第五條ニ從ヒ大審院及ヒ控訴院以下ノ裁判所ニ歸シタル懲戒權ヲ行フ司法官ハ一切政事ニ關スル討議ヲ爲スヿヲ許サス

又司法官ハ共和政府ノ主義又ハ政体ニ敵對スル示威ヲ爲スヿヲ許サス

以上ノ規定ニ違犯スル所爲ハ懲戒處分ヲ受クヘキ過失ヲ構造スヘシ

法官ノ獨立

第十五條　第十一條ニ記載シタル期限經過ノ後ハ控訴院長、局長、評定官及ヒ始審裁判所長、副所長、判事、判事補ハ高等會議ノ意見ニ依ルニ非サレハ轉職セラルヽヿヲ得ス

○此轉職ハ其法官ニ對シ一切職務ノ變更、降等及ヒ減俸ヲ來サヽルモノトス

不治疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘサル法官ハ高等會議ノ意見ニ依リ職權ヲ以テ退職ヲ命セラルヽヿヲ得ヘシ

○右意見ハ千八百二十四年六月十六日ノ法律ニ定メタル手續ト條件トニ從テ之ヲ下スモノトス

高等會議ノ審理裁定

第十六條　高等會議ハ司法大臣ノ命令アルニ非サレハ審理ニ着手スルヿヲ得ス而シテ法官ノ見込ヲ聽キ又ハ之ヲ招喚シタル後ニ非サレハ其裁定ヲ爲シ又ハ其意見ヲ下スヿヲ得ス

司法大臣ノ監督

第十七條　司法大臣ハ民刑諸裁判所ノ法官ニ對シ監督ノ權ヲ有ス

司法大臣ハ法官ヲ譴責スルヿヲ得

○其譴責ハ局長、評定官、所長、判事、判事補ニ對シテハ院長ヨリ又檢察官ニ對シテハ檢事長ヨリ之ヲ其法官ニ通達ス

司法大臣ハ法官ニ歸責セラレタル所爲ニ付キ其辯明ヲ爲サシムルカ爲メ之ヲ召喚スルヿヲ得

俸給規定ノ實施

第十八條　法官ノ俸給ニ關スル前數條ノ規定ハ千八百八十四年一月一日ヨリ之ヲ實施スヘシ

前第三條及ヒ第七條ノ規定ヨリ生スル所ノ俸給ノ減額ハ此法律發布ノ際在職スル法官及ヒ書記ニ之ヲ適用セス但シ該法官ハ舊ニ依リ各々現行法律ニ從ヒ附與セラルヽ所ノ俸給ヲ受クルモノトス

抵觸法律ノ廢止

第十九條　共和第十年十一月十六日ノ元老院議定律第八十三條、千八百十年四月二十日ノ法律第五十一條乃至第五十六條、千八百二十四年六月十六日ノ法律中此法律第十三條ニ抵觸スル各條、千八百二十八年九月二十七日ノ命令第三條、千八百三十八年四月十一日ノ法律第三條乃至第六條並ニ一般ニ此法律ニ抵觸スル所ノ從前ノ規定ハ悉皆之ヲ廢止ス

佛國裁判所構成大要終

明治廿三年六月十九日印刷
明治廿三年六月二十日出版

正價金貳拾五錢

編輯者　坪谷善四郎　牛込區矢來町四番地
發行者　野口竹次郎　日本橋區本石町二丁目十八番地
印刷者　山口竹二郎　京橋區總十郎町十五番地
發行所　博文館　東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

版權所有

政治學
經濟學
法律學

講習全書發兌規定

本書ハ全部ヲ二十四卷トシ明治廿三年一月ヨリ十二月迄毎月二回宛發兌シ一ケ年間ヲ以テ全部完結大成スルモノトス其科目、著者、定價ハ左ノ如シ

總科目

政治學

- 政治原論
- 國家學
- 國法學
- 憲法論
- 主權論
- 政躰論
- 撰擧論
- 會議法
- 行政法
- 財政學
- 統計學
- 國際法
- 會計法
- 日本財政史
- 行政法太意
- 日本政躰史
- 國際私法

經濟學

- 銀行論
- 經濟原理
- 經濟學歷史
- 經濟研究法
- 國債論
- 歲計論
- 金融論
- 外國爲替論
- 外國貿易論
- 農業經濟論
- 官有財產論
- 應用經濟學
- 租稅論
- 治罪法原理
- 民法原理
- 商法原理

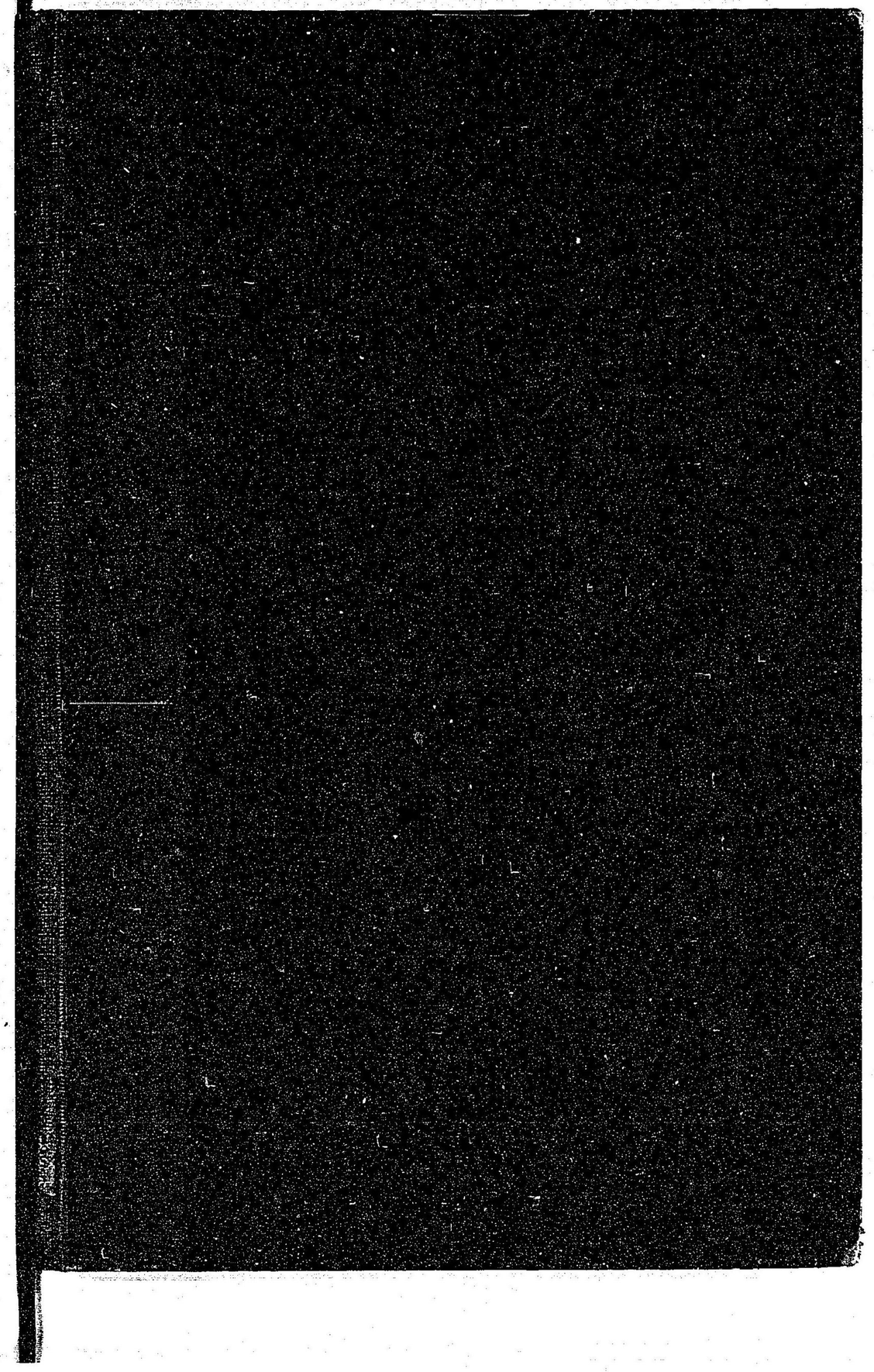
法律學

- 訴訟法學通論
- 刑法原理
- 法理學
- 日本古代法

本書著述者

- 法學士石川錦一郎君
- 法學士藤悌治君
- 法學士原健三君
- 法學士田齋一君
- 法學士亀井英三郎君
- 法學士條慎藏君
- 文學士天野爲之君
- 文學士賀長文君
- 法學士呵見次郎君
- 法學士淳六郎君
- 法學士谷芳郎君
- 法學士嵯峨根不二郎君
- 法學士馬君
- 法學士志立鐵次郎君
- 法學士嶋及平君
- 法學士横田秀雄君
- 法學士畸東藏君
- 法學士牧兒馬太郎君
- 法學士吳文聰君
- 法學士由木如長君

正價

- 數一冊 拾錢 ●二百二十頁金廿一錢 ●六冊(三ヶ月分紙數二冊半ヶ年分紙數五千頁)前金貳圓五拾錢 ●前金壹圓四拾錢 ●前金七十五錢 ●三冊(半ヶ年分紙數五千頁)前金五圓 ●郵稅一冊貳錢五厘宛

21
258